

優秀賞

つむぐ、つづぐ、つなげる

帝塚山大学 4年 森本 日奈

祖母の家には、宝物がある。祖母の家は私の家のすぐ隣にあって、築四十五年になる。もうピカピカではないけれど、温かくて、そこに居るだけで落ち着く。私の大好きな場所だ。宝物は、その家の居間の壁だ。

ベニヤ板で出来た茶色い壁の西の端に、親戚みんなの身長が記されている。毎年、お正月とお盆にみんなが集まって、年齢が上の者から順番に背丈を測る。頭の先に定規を置いて鉛筆で線を引き、横に日付と名前、何センチかを書く。私が生まれる前からずっと続いている、我が家の伝統行事だ。

一番低いものは三歳の九十七センチ、一番高いものは二十七歳の百七十八センチで、どちらも十五年以上前に付けられたものだ。小さい頃は測るたびに背が伸びていて嬉しかったけれど、最近はずっと変わらない。今の私は、三年前の祖母と同じ身長だ。今ではもうすっかり抜かしてしまっただ。父や母は、少しずつ縮みはじめた自分の背に落胆している。それでもみんな、懐かしさと楽しさから、その壁の前に立つ。

もう亡くなってしまった人の背丈も、その壁には残されている。十数年前に亡くなった曾祖母の名前が書かれた線を見て、祖母が

「もうすぐお母さんと同じ背丈になるわ」

とつぶやいていた。亡くなった人のことを考えながら壁に手を当てると、何年も前にその人が背中をつけていた時の温かさを感じるような気がする。壁は、人が生きた証を残してくれる。そして、今年のお盆には新しい名前が壁に増える。去年生まれた親戚の子どもの線は、今までで一番低いものになるだろう。

早くに生まれた人の背を、後の世代が抜かしていく。もういない人の名前と線がずっと残り、新しい名前が増えていく。みんなの成長と歴史を刻み、紡ぎながら、壁はずっと残り続ける。今年のお盆もきつと、みんなを背を測るだろう。宝物がまたひとつ増えるのが、心から楽しみだ。